

関東軍 (近代日本戦争史字典)

満州 (中国東北部) に駐屯した日本の陸軍部隊。日露戦争の結果、明治二十八年 (1905) 九月調印のポーツマス条約によって、長春・旅順間の鉄道を譲り受けるとともに、日本は鉄道守備隊駐屯権を獲得。同条約追加約款で両国とも一キロにつき十五名以内の鉄道守備隊を置く権利を持った。日本がこの講和条約で遼東半島租借権をもロシアから譲り受けていたから、この租借地境界長春までの鉄道距離六百二十五キロを計算すると、守備隊の最大限度は九千二百七十五名の計算になった。この鉄道守備隊が関東軍であり、大正八年 (1919) 四月に改編され、満州駐留の1個師団と独立守備隊6個大隊からなる関東軍である。この関東軍が、中国にたいする侵略の先兵としての役割を果たした。

満州事変以降はかいらい国家Ⅱ満州国を事実上、支配するとともにソ連を仮想敵国とした巨大な外征軍に成長し、昭和十六年夏には対ソ開戦準備のため関特演 (関東軍特殊演習) の名目で空前規模の兵力動員を行って、ソ連に軍事的圧力を加えた。兵力数は70万、最大時75万人である。

〔関東軍軍歌〕 (戦争が遺した歌 長田暁二)

昭和11年 (1936) 3月10日の陸軍記念日を期して、詞は関東軍の公募に依るものだった。当時軍属の米田俊の作品が一等当選した。作曲は陸軍戸山学校軍楽隊内で競作の結果、松下哲の作品が当選した。

彼は明治37年3月15日鹿兒島県出身。陸軍戸山学校、日大芸術学部卒。堀内敬三に作曲を師事。「関東軍軍歌」他、50余曲を作曲した。敗戦時、南支派遣軍軍楽隊長になっていた人で、戦後は堀内敬三とともに音楽教育研究所理事長として活躍していた。

関東軍軍歌

一、暁雲の下 見よ遙か
起伏涯なき 幾山河
我が精銳が その威武に
盟邦の民 今安し
榮光に満ち 関東軍

二、興安嶺下 見よ曠野
父祖が護国の 靈眠り
いま同胞が 生命を
正義に託す 新天地
前衛に立つ 関東軍

三、烈々の士氣 見よ歩武を
野行きの山行 土に臥し
寒熱何ぞ 死を越えて
挺身血湧く 真男兒
風雲に待す 関東軍

四、北斗の星座 見よ使命
暗雲天を 鎖すとも
神与の剣 閃けば
妖魔散じて 影空し
東亜の護り 関東軍

五、旭日の下 見よ瑞氣
八紘一字 共栄の
大道茲に 拓かれて
燦々たりや 大稜威
皇軍の華 関東軍

関東軍軍歌

米田 俊 作詞
松下 哲 作曲

